

京都大学	博士(文学)	氏名	王 鏗
論文題目	魏晉南北朝時期三吳地域の研究		
(論文内容の要旨)			
本論文は魏晉南北朝時代(六朝時代)における三吳地域の歴史的事実を解明する。全体は第一～第八章および〈附録 『晋書』五行志の災害記録〉〈参考文献目録〉より成る。			
〈第一章 序言〉は、まず〈一 問題意識〉において、中国史において分裂の時代が、「地域」発展の時代であること、分裂時代の「地域」に対する研究は、政権に不可欠の最重要地域を問題とすべきことを指摘した上で、六朝時代については、三吳地域がそうした最重要地域に当たるとして、これを本論文の研究対象とすることが確認され、三吳地域の研究が、中央偏重で立体感を欠く憾みのあった従来の六朝史研究を克服するものと主張する。〈二 以前の研究の回顧〉では、従来、六朝時代の三吳地域を一個の全体として研究した著作はなお出現していないが、三吳地域の特定の地区あるいは特定の分野につき言及した著作は存在すると、その重要なものを概観する。			
〈第二章 六朝時期“三吳”の地理的範囲〉は本論文の主題である「三吳」の地理的範囲を確定する。「三吳」については、1『水経注』; 吳郡・吳興郡・会稽郡、2『通典』; 吳郡・吳興郡・丹陽郡、3 胡三省『資治通鑑注』; 吳郡・吳興郡・義興郡、の三説がある。論者は厳密・精確な意味としては『水経注』説が妥当であることを確認するが、その一方で、「三吳」を広義で用いる事例をも挙げて解説している。			
〈第三章 三吳地域の地理的形勢と交通状況〉は「傾斜を主とする地形およびそれに由来する発達した水路網」と副題する。まず〈一 自然地理〉において〈1 吳郡〉〈2 吳興郡〉〈3 会稽郡〉の三吳を構成する三郡のそれぞれについて自然地理的特徴を整理し、ついで〈二 自然河流〉において吳郡・吳興郡・会稽郡の河川をそれぞれ〈1 婁江、松江、東江〉〈2 東苕溪、西苕溪〉〈3 錢塘江、浦陽江、曹娥江、姚江など〉として概観し、ついで〈三 人工運河〉において三吳および首都建康をつなぐ運河を〈1 江南運河〉〈2 破崗瀆〉〈3 荻塘と胥溪〉〈4 浙東運河〉として概観する。			
〈第四章 六朝時期三吳地域の製造業〉は特徴的な製造業(手工業)につき概観する。〈一 銅鏡業〉〈二 製瓷業〉〈三 紡織業(1 麻、葛織業 2 絹織業)〉〈四 製紙業〉の構成を採る。			
〈第五章 六朝時期三吳地域の国内・国際貿易〉は〈一 国内貿易〉〈二 国際貿易〉の二節に分かれる。〈一〉は〈1 銅鏡市場〉〈2 瓷器市場〉〈3 紡織品市場〉〈4 瓜果蔬菜市場〉〈5 糧食市場〉〈6 小商品及び薬の市場〉の構成で、三吳地域の特産品とその流通のありかたについて概観する。			

〈二〉は〈中日間の貿易を中心に〉の副題をもち、おおむね三国呉から西晋時代における三呉地域と日本列島の交易の復元を試みる。まずは、〈1. “亶洲”と“貨布”〉において、『三国志』孫権伝に見える「亶洲」が日本列島にあたること、「時育至会稽貨布」の「貨布」が「貨市」の誤りであることを確認し、〈2. 当時の航海技術がこの海上貿易路の存在に提供した可能性〉では、三国時代の航海術について、季節風の利用、天文航法、舵、櫓、船艙の区画、多帆技術などの存在を確認し、それらが会稽郡と日本列島の間の航海を可能にしたとし、〈3. 当時の中日間貿易の内容〉として銅鏡・青瓷と真珠の輸出入を想定し、〈4. 会稽郡における上陸地点〉として会稽郡鄞県・句章県を想定し、〈5. 中日双方で交易が発生した時の支払手段について〉では綿(まわた)の使用を想定する。

〈第六章 六朝時期三呉地域の農業と水利事業の状況〉は、〈一 農業の状況〉〈二 水利事業の状況—水利事業の組織形態を中心に〉の二節に分かれる。〈一〉は〈1. 三呉地域の畑作作物の来源〉において、三呉地域の畑作作物の品種およびその栽培技術を、永嘉の乱を逃れた北中国からの移民がもたらしたものとする説を検討し、これを否定し、またこの時期、政府の強力な指導によって、畑作作物の生産が強化されたことを確認する。ついで〈2. 糧食の産量について〉においては、糧食貯蔵量を手がかりに、東晋南朝時代の糧食供給構造における三呉地域の地位を論ずる。

〈二〉は三呉地域の水利事業について、民間の介入の強さを強調し、完全に地方豪族が主宰した錢塘県の防海大塘修築、地方豪族が立案して、政府の介入を要請した武康県の排水路開鑿、民間の水利秩序を政府が介入破壊した会稽郡の塘丁税の事例をそれぞれ検討する。

〈第七章 六朝時期三呉地域非門閥貴族人士の政治的活路—商人、門生、恩倖の關係〉では、〈一 寒人階層について〉において、門閥貴族と寒人階層の社会的な格差を具体的に再確認し、〈二 門生について〉では三呉地域の少なからぬ商人を含む富人は寒人身分であったが、門閥貴族の門生となり、その推薦によって出仕したことを確認する。ついで〈三 恩倖について〉は宋・南齊時代における恩倖の台頭を指摘したのち、その権力がたいへん大きかったこと、基本的に寒人であったこと、商人出身者が多かったこと、均しく三呉地域出身者であったことが確認される。〈四 門生と恩倖の關係〉では門生・恩倖の出身が重複することに注目し、寒人が商業經營・土地經營によって富人となり、勢力のある門閥貴族ないし官僚に高額の束脩を支払って門生となり、その推薦で出仕し、そのうち運のよいものが恩倖となる、というモデルを提示し、それを可能にしたものとして三呉地域の經濟構造を強調する。

〈第八章 結語〉では『隋書』地理志の記述する六朝時代江南の經濟的後進性が、『漢書』地理志を引き写した、実態とは懸け離れたものであることを指摘した上で、第四章以下の記述を要約、再確認する。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、魏晉南北朝時代(六朝時代)における三吳地域(吳郡・吳興郡・会稽郡)の歴史的事実の解明を試みるものである。

論者によれば、従来の六朝史研究は中央(建康)偏重で立体感を欠く憾みがあった。論者は、分裂の時代は各地域が独自の発展を遂げる時代であるという田餘慶の議論に基づき、中央と各地域との関係をふまえた六朝史像の再構築を試み、その際、六朝政権に不可欠の意義をもった三吳地域の研究こそがその第一歩となるとする。ところが、三吳地域を一個の全体として扱った研究は従来存在せず、特定の地区ないし特定の分野について言及する研究があるのみであった。

本論文の一つの特色は、これら個別的な研究を六朝時期三吳地域という枠組みにおいて整序したところにある。本論文は、自然河川と交通(第三章)・製造業(第四章)・貿易(第五章)・農業と水利事業(第六章)と、その大部分が、政治史に代表されるような人文的歴史学ではなく、自然科学の知識をも大きく要求される産業史各分野を扱うものとなっている。産業史各分野の先行研究は、やむをえないことではあるが、より一般的には当該分野の記述については詳細であるが、全体的な歴史像に位置づけることをそもそも志向しない、あるいはきわめて図式的な作業に終わっている。本論文は産業史各分野に関わる個別的な先行研究を十分に咀嚼した上で、それらによって提示された所見を整序することによって六朝時期の三吳地域の歴史的全体像への帰納を試みているのである。

産業史については、文献はそもそも零細かつ断片的で、考古学的資料に依存せざるを得ず、さらに自然科学など隣接諸分野の知識をも総動員して、文献の記述をいわば「膨らませる」必要がある。政治史に代表される「正統的」な人文的歴史学に馴れた眼から見ると一面で危ういが一面で意外性に富んだまことに興味深い「史実」が抽出されるのである。

個別的になされてきた諸研究を結合するという今回の作業が、従来気づかれていなかった新たな問題提起の契機となったことにまずは注目したい。

たとえば、第一章においては、東晉時代に会稽に流寓した北方の門閥が、曹娥江～剡溪流域の上虞、始寧、剡県に居住したという王志邦(1989)の見解を受けつつ、この地域が正に会稽郡の製造業とりわけ瓷器業が発達した場所であることを確認した上で、北来門閥貴族が会稽地区の製造業、運輸業と商業などに参与した可能性が大きいとし、門閥貴族の経済的基盤を莊園とする通説の見直しを主張する。

また第五章の三吳地域特産品の国内市場に関する議論では、会稽郡上虞を後進地域として絹織物市場の存在を伝える『後漢書』朱儁伝の記述を否定する佐藤武敏の説を批判するが、それは第四章において確認した、上虞が瓷器生産の中心であり、資本が蓄積され、交通の要衝でもあったという認識に基づく。

これらの指摘は、本論文においてはおおむね問題提起にとどまるものであるが、と

りわけ前者は、門閥貴族ひいては中国中世社会のイメージに大きな変容を迫りうる問題であり、将来的な研究可能性をはらむものとして大きく評価したい。

論者は「周一良先生〈北齊書〉批校」(2007)・「周一良先生〈南齊書〉批校」(2008)・「周一良先生〈梁書〉批校」(2009)・「周一良先生〈梁書〉批校」(2010-11)として周一良の一連の魏晉南北朝正史研究の整理に携わり、また尾崎康『正史宋元版の研究』(1989)の中国語訳を手がけるなど、史料学・文献学に関わる堅実な業績を蓄積しているが、本論文の特徴として今ひとつ特筆すべきは、史料学ないし文献学的考証の緻密さないし柔軟さである。

たとえば、第二章の「三呉」の考証について、一つの語彙の解釈にあたり、狭義(厳密・精確な意味)・廣義(汎称)の双方が存在することを実例を以て説得的に提示し、往々にしてみられがちなスコラの形式論理に陥らない。

論者はまた日本の研究の中国における翻訳紹介に多大の業績をもつが、本論文においては、今日の日本の研究者がある意味で忘却している、ことに戦前の業績をいわば発掘、再評価して行論に活用している。日本の研究史に対するある部分で日本人以上の理解を示すものといえよう。

第六章後半の水利事業、および第七章の寒人に関する記述は、人文学的な歴史学の範疇に属する。六朝時期三呉地域の水利事業に対する在地有力者の関与を、国家権力を侵犯するものとする評価は、専制国家の役割を再確認するものであり、門閥貴族に偏向し国家を相対的に軽視した研究史を批判する、日本近年の研究動向に通ずる。

本論文は魏晉南北朝時代の三呉地域の具体的歴史像を復元するという所期の目的を見事に達したものといえ、またその記述は意外性と創見に富み、さらなる研究可能性を予見させるものといえよう。しかしながら、無論改善の余地がないではない。

第一に、呉の運河(第三章)、銅鏡・麻織物(第四章)、畑作作物(第六章)などに関わる『越絶書』の記述を春秋時代の史料として用いることは、無条件には了解し得ない。先秦を扱った文献に対する史料批判の甘さは、論者だけの問題ではないが、『越絶書』の特定の材料が先秦期に遡る可能性はあるものの、飽くまで後漢初年の編纂物として扱う必要がある。第二に、魏晉南北朝時代(六朝時代)、3～6世紀の400年間を扱うにも拘わらず、その時代的变化が明示されない点はやはり物足りない。産業史とたとえば政治史とでは「時間軸」が異なるという反論もありえようが、六朝史研究の再構築を標榜する以上、それなりの政治史的概観を提示する必要はあったように思う。また史料解釈についても議論の余地は少なくない。とはいえ、これらの点が、本論文の価値を著しく損なうものでないことはいうまでもない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2012年4月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連して試問した結果、合格と認めた。